

Jackendoff の三部門並列言語構造による与格交替の分析

An Analysis of Dative Alternation in Jackendoff's Language Model of the Tripartite Parallel Architecture

大岩 秀 紀

Abstract

This paper aims at making an analysis of Dative Alternation within the framework of the linguistic theory proposed by Jackendoff (1997, 2002, others). After reviewing generative approaches to Dative Alternation, this paper focuses on semantic differences between Dative Construction and Double Object Construction and proposes an appropriate lexical semantic representation for each construction and the verbs concerning Dative Alternation such as *give*, *send*, *buy*, *make*, etc. It is concluded that Dative Construction and Double Object Construction are related by a semantic inference rule and that the grammaticality of the both constructions is licensed by a compositional interpretation rule and/or concerning verbs' syntactic/semantic features. Finally a tentative suggestion will be made on the cause of the difference between an English Dative Alternation expression and its Japanese equivalent expression with a compound verb, based on the linguistic structure assumed by Jackendoff.

1. 序

英語において「誰かに何かをあげる」という授与表現を、次のように2通りの形式で言い表すことができることはよく知られている。

(1) a. Mary gave a book to the man.

b. Mary gave the man a book.

中学校や高等学校で教わる学校文法では、(1a)は第3文型(SVO)、(1b)は第4文型(SVOO)という文型にそれぞれ分類されている。現代の英語学では、第3文型に相当する(1a)のような前置詞を伴う構文形式は与格構文(dative construction)、第4文型に相当する(1b)の構文は二重目的語構文(double object construction)と呼ばれている。そして、この2文が意味的に対応し交替することは与格交替(dative alternation)と呼ばれている。

また、この与格交替に関わる前置詞として、toではなくforを伴う構文があることもよく知られている。

(2) a. Mary bought a book for the man.

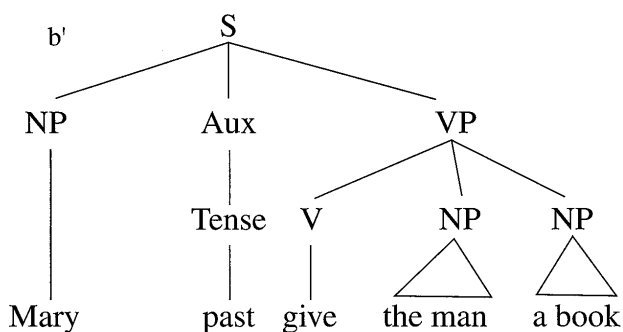
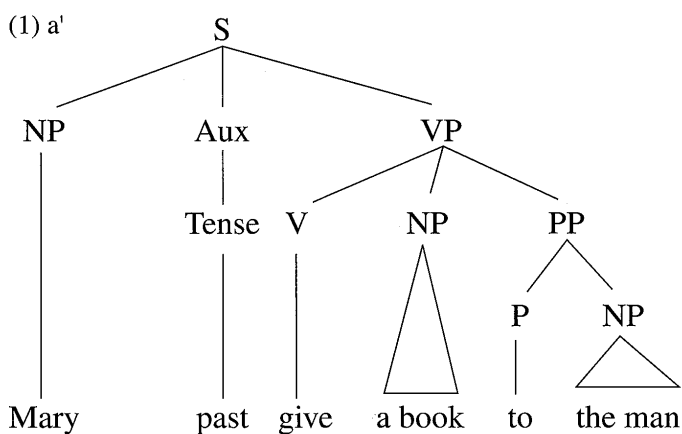
b. Mary bought the man a book.

ここでは、(1a)のように to を伴う構文を to- 与格構文、(2a)のように for を伴う構文を for- 与格構文と呼ぶことにする。¹

本稿では、この与格交替に関して、これまでの生成文法による分析を概観した後、Jackendoff (1990, 1997, 2002 等) によって提案されている言語モデルによって、与格構文・二重目的語構文の統語的・意味的関連性がいかに説明できるかを試みる。

2. 生成文法における与格交替の分析

句構造規則によって生成された深層構造が変形規則によって表層構造へと派生されると仮定されていた初期の生成文法では、二重目的語構文が Dative Movement という変形規則によって与格構文から派生されると考えられていた。例えば、生成文法標準理論の入門書である Akmajian and Heny (1975: 183-184) では、与格構文 (1a) を二重目的語構文 (1b) へと変換する与格移動規則が仮定されている。(1) の句構造と与格移動規則 (3) を以下に示す。



(3) Dative Movement (Optional)

SD: V - NP - $\left\{ \begin{array}{l} \text{to} \\ \text{for} \end{array} \right\}$ - NP

1 2 3 4

SC: 1+4 2 ϕ ϕ

「原理とパラメータのアプローチ」と呼ばれるようになった 1980 年代以降の生成文法では、文の基

本構造は語彙項目の選択特性を反映したものであり、その特性はD構造、S構造、LFすべてのレベルにおいて満たされなければならないとする「投射の原理」(Projection Principle)(Chomsky 1981)が仮定された。さらに Baker (1988) の「主題役付与均一性仮説」(Uniformity of theta assignment hypothesis: UTAH)により、動詞のもつ意味役割が主題階層を通じて、統語構造の然るべき位置へと写像されるとする考えが、生成文法の主流となった。Baker (1996: 7) が仮定する写像の原理は以下のようなものである。

(4) If the theta-role of an argument X is higher than the theta-role of a second argument Y, then X c-commands Y at the level of D-structure.

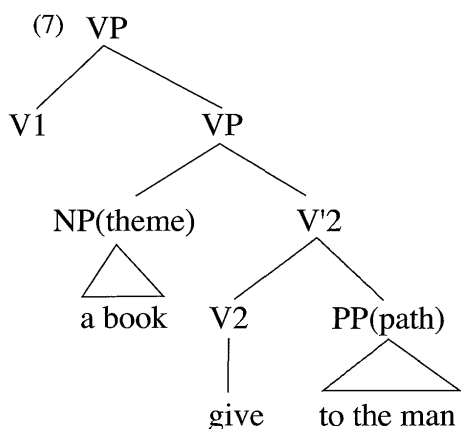
しかし、主題階層における意味役割の位置付けは、Baker が指摘する通り、研究者によって異なる。agent が theme より高い位置に来るに関しては一致しているが、goal/benefactive と theme/location の順位に関しては、研究者が対象とする言語現象によって異なった順位が提案されている。

- (5) a. Agent>benefactive/goal>theme>location
 b. Agent>goal/experiencer/location>theme
 c. Agent>theme>goal/benefactive/location

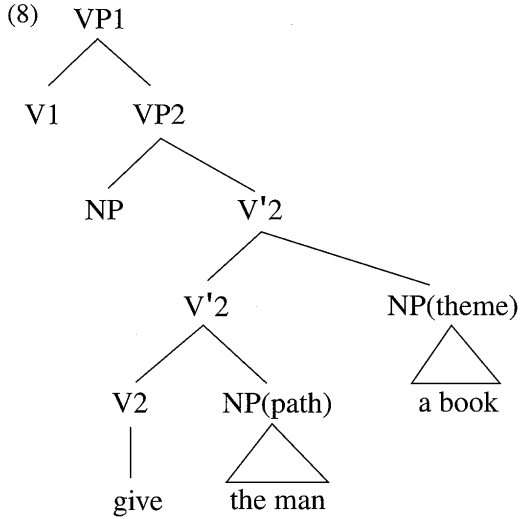
Baker (1996) は (5c) の立場を取り、Larson (1988) が提案した二重の V をもつ VP-shell 構造にしたがい、意味役割を持つ各項はそれぞれ次の統語位置に写像されるとしている。

- (6) a. Path arguments (including goals, benefactives) map onto complements of V.
 b. Theme/patient arguments map onto the (lowest) specifier of V'
 c. Agent/actor arguments map onto a position outside the (minimal) VP.

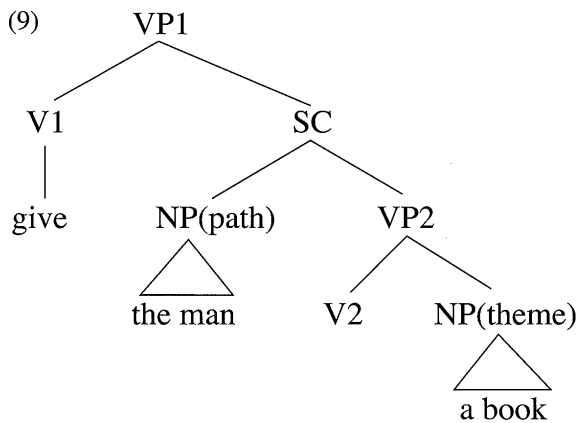
すなわち、Baker (1996) や Larson (1988) では、path 項と theme 項が写像される統語位置は以下のようになり、与格構文の統語構造を基本としていることが分かる。V2 に基底生成された動詞 give が V1 へ上昇し、(1a) の文が生成される。



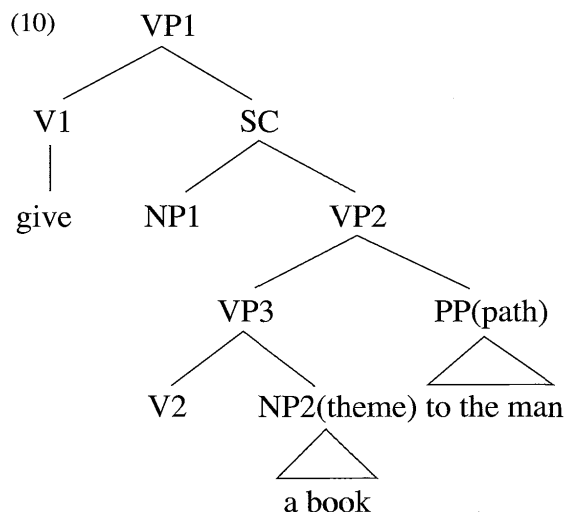
Larson (1988) は、二重目的語構文の D 構造として、次のような構造を仮定している。この構造においても、theme 項が path 項より高い位置に基底生成されている。path 項を表す NP が VP2 の指定部へ移動し、V2 の give が V1 へ上昇することによって、二重目的語の表層語順が得られるとしている。



一方 Aoun and Li (1989) は、二重目的語の構造を基本とし、path 項が theme 項より高い位置に基底生成するとしている。そして、2つの目的語 NP 間に所有関係があることに着目し、所有を表す空の V をもつ小節 (small clause) を成していると仮定する。



Aoun and Li (1989) による与格構文の基底構造は (10) のようなものである。彼らの分析ではやはり、path 項は theme 項より高い位置を維持している。この構造に一種の受動化が適用され、theme 項を表す NP2 が SC の主語位置 NP1 へと移動し、与格構文の表層語順が得られるとしている。



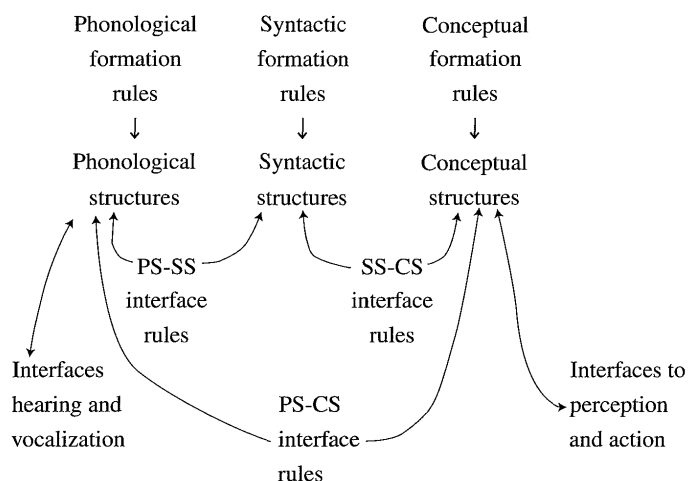
このように、「原理とパラメータのアプローチ」では、UTAHと各研究者が仮定する主題階層にしたがって、与格構文および二重目的語構文の基底構造を与え、どちらか一方に然るべき変形を適用することによって、適切な表層語順が派生されると考えるのである。いずれの分析も、語彙項目の意味選択特性が文構造へと写像され、両構文の概念的同意性が統語構造上で保証されると仮定するものである。

3. Jackendoff の constraint-based model による与格交替の分析

3.1. Jackendoff の言語モデル—三部門並列言語構造

Ray Jackendoff は、1970年代の生成文法モデルに意味解釈部門の在り処を構築し (Jackendoff 1972)、句構造分析の一般化を行う (Jackendoff 1977) など、生成文法理論の発展に寄与してきたが、1980年代以降の著作 (Jackendoff 1983, 1990, 1997, 2002 等) では、意味論を統語論から自律したものと考えようになり、それぞれ独自の形成規則をもった統語構造・意味構造・音韻構造が対応規則で結ばれているという「三部門並列言語構造」を提案している。彼の提唱する意味論は「概念意味論」と呼ばれる。²彼の言語モデルは次のように図示される。(Jackendoff 2002: 125)

(11) The tripartite parallel architecture



Jackendoff (2002) では、Chomsky (1995) を初めとする生成文法の極小主義プログラムを "syntactocentrism" (統語論中心主義) と呼び、自らの理論的立場を明確に異にするようになった。さらに、Culicover and Jackendoff (2005: 14-15) では、生成文法において不変的に考えられてきた概念と自らの理論的主張との違いを、次のように明示している。まず、生成文法における不変的な了解事項とは次の4点である。

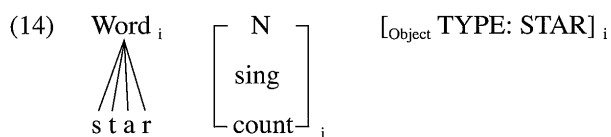
- (12) a. The formal technology is derivational.
 b. There are "hidden levels" of syntax.
 c. Syntax is the source of all combinatorial complexity; phonology and semantics are "interpretive".
 d. Lexicon is separate from grammar.

それに対し、Culicover and Jackendoff (2005) は、本流となる生成文法理論の概念と相反する以下のような仮説を立てる。

- (13) a. The formal technology is constraint-based.
 b. There are no "hidden levels" built of syntactic units.
 c. Combinatorial complexity arises independently in phonology, syntax, and semantics.
 d. There is a continuum of grammatical phenomena from idiosyncratic (including words) to general rules of grammar.

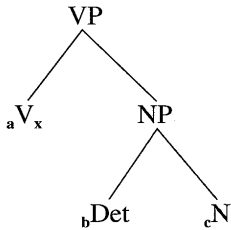
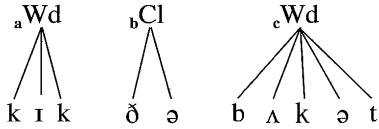
本稿でそれぞれの主張について詳しく見る余裕はないが、ここに示された考えは、Lexical Functional Grammar (LFG) や Head-driven Phrase Structure Grammar (HPSG) といった生成文法の代替理論や Construction Grammar (CxG)、Cognitive Semantics などの理論的主張に近似した立場を取るものであり、これまでの本流となっていた生成文法理論 (標準理論→拡大標準理論→改訂拡大標準理論→統率・束縛理論または原理とパラメータのアプローチ→極小主義プログラム) の根幹をなす概念と真っ向から対立するものである。

生成文法では、語彙項目は統語構造に挿入 (もしくは併合) され、音韻的・意味的素性はそれぞれ適切な「解釈部門」(PF や LF) で解釈されると見なされているが、Jackendoff が提唱するこの言語モデルでは、語彙項目それ自体が音韻・統語・意味間のインターフェイスの一部であり、三つの構造に同時に挿入され、構造間のつながりが認可されるものと見なされる。例えば、"star" という単語はそれ自体が、(14) のような音韻・統語・意味の対応規則である。(Jackendoff 2002: 131)

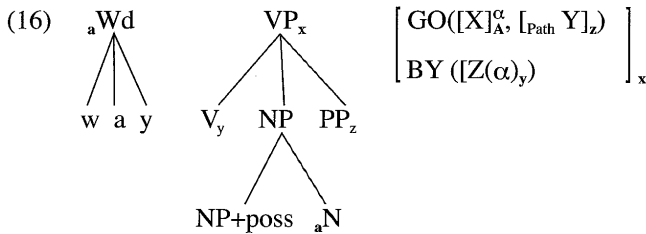


語だけでなく、イディオムなどの固定表現や構文も対応規則である。例えば、イディオム kick the bucket や way 構文も次のような対応規則で表示される。(Jackendoff 1997: 169, 172)

(15) kick the bucket



[DIE([ʌ]_x]



この考えを押し進めていけば、NP-V から成る自動詞構文や NP-V-NP という連鎖をもつ他動詞構文も、意味の具体性は減るものの、スキーマ的な意味に対応する規則と見なすことができる。これが (13d) で示された語と文法規則は区別されるものでなく連続体を成すという考えである。

生成文法が、適格な文の生成を派生に基づく (derivation-based) ものと見なしているのに対し、Jackendoff の提唱するこの言語モデルでは、音韻・統語・意味の三部門がそれぞれ自律しつつ、互いに対応規則で結び付けられていることから、「三部門並列モデル」(tripartite parallel model) と呼ばれ、適格な文は制約に基づいて (constraint-based) 認可されるものと見なしているのである。

3.2. Jackendoff の言語モデルによる与格交替の分析

Jackendoff の言語モデルにしたがうと、与格交替現象はどのように説明されるのか考察してみよう。まず、前節で見たとおり、生成文法のアプローチとは異なり、語彙項目の情報から構文が派生されるわけではないことから、授与動詞のもつ意味的・統語的情報が与格構文・二重目的語構文を派生するわけではない。授与動詞のみならず与格構文・二重目的語構文自体も音韻・統語・意味をセットとした情報を持っているのであり、個々の動詞の統語・意味情報と構文自体の統語・意味情報が適合するか否かによって、その動詞を含む構文の適格性が判断されると仮定する。³

3.2.1. to- 与格構文と二重目的語構文の概念構造

まず、to- 与格構文自体は次のような音韻構造 (Phonological Structure; PS)・統語構造 (Syntactic Structure; SS)・概念構造 (Conceptual Structure; CS) の対応をなしていると考えられる。

(17) PS [Phrase]₁ [Word]₂ [Phrase]₃ [tə]₄ [Phrase]₅

SS [_{VP} [NP]₁ [_v V₂ [NP]₃ [_{PP} P₄ [NP]_{5,6,7}]]]₈

CS [x₁ CAUSE [y₃ MOVE [TO₄ z_{5,6,7}]]]₈

要約すれば、[NP₁-V₂-NP₃-to₄-NP₅] という音韻・統語連鎖が、NP₃ で表される変項 y₃ を NP₅ で表される変項 z₅ へ移動させるという意味に対応するのである。この統語連鎖自体は適格な英語の語順や句構造を作り出す句構造規則もしくは X' スキーマによって構築されるものとする。

一方、二重目的語構文には次のような構造を仮定する。

(18) PS [Phrase]₁ [Word]₂ [Phrase]₃ [Phrase]₄

SS [_{VP} [NP]₁ [_v V₂ [[NP]₃ [NP]_{4,5}]]]₆

CS [x₁ CAUSE [z₃ BE WITH y_{4,5}]]₆

二重目的語構文の二つの目的語間に所有関係が含意されることは良く知られている (岸本 (2001) 参照)。そこで、所有関係を表す概念を影山 (1996) にしたがって、BE WITH で表すことにする。すなわち、[NP₁-V₂-NP₃-NP₄] で表される統語連鎖は、NP₃ で表される変項 z₃ に NP₄ で表される変項 y₄ を所有させるという意味に対応する。

では、この二つの構造間に意味の対応があることは、どのように説明されるのであろうか。Jackendoff の仮定する言語モデルにしたがえば、これら二つの構文の統語構造に操作を加えて構文間の意味の対応を説明するべきではない。(17) の与格構文は、x が y を z に移動させるという意味を持ち、(18) の二重目的語構文は、x が z に y を所有させるということを意味する。そうすると、(17) の z が単なる y の行き先ではなく、然るべき有生の受け取り手である場合、結果として z が y を所有するに至ることを含意すると推測できる。⁴そこで、これらの構文は、統語構造間の変換によって結び付けられるのではなく、概念構造間の次のような推論規則によって間接的に関連付けられるとする。

(19) [x CAUSE [y MOVE TO z]] → [x CAUSE [z BE WITH y]]

if z is interpreted as an appropriate animate recipient

[x CAUSE [y MOVE TO z]] と [x CAUSE [z BE WITH y]] は、それぞれ同一事象の異なった側面を表しているとも言える。すなわち、[x CAUSE [y MOVE TO z]] は「何かを移動させる」という行為部分、そして [x CAUSE [z BE WITH y]] は移動行為による結果部分に焦点を当てているのである。さらに、[x CAUSE [y MOVE TO z]] は、[x CAUSE [z BE WITH y]] の前提となるが、その逆は成立しない。

3.2.2. 与格交替に関わる動詞の概念構造

次に個々の動詞とこれらの構文との関連を見る。to- 与格交替に生じる基本的な動詞の一つである give は、その語彙固有の意味として所有関係の移動を有していることから、次のような構造を成していると考えられる。所有関係の移動は、結果として受け取り手が譲渡されたものを所有することになるから、(19)の推論規則がこの動詞にも働くので、[x CAUSE [z BE WITH y]] という概念構造も持つことになる。この概念構造は、(17) および (18) いずれの構文にも適合するので、両方の構文 (1a, b) が認可される。

(20) give

PS /giv/

SS V

CS [x CAUSE [POSSESSION y MOVE TO z]] ⇒ [x CAUSE [z BE WITH y]]

岸本 (2001: 136-137) で示されているとおり、次のようなイディオム的な表現や give を用いた軽動詞構文は二重目的語構文しか取れない。

(21) a. Give me a hand.

b. *Give a hand to me.

c. John gave me his cold.

d. *John gave his cold to me.

(22) a. John gave Mary a kick.

b. *John gave a kick to Mary.

これらの構文では、主語から間接目的語への物理的移動や転移は起こっておらず、二つの目的語の間には「所有関係」の発生が含意されるので、与格構文では容認されず二重目的語構文でのみ容認可能であると岸本 (2001) は説明しているが、本論はこの説明に理論的根拠を与える。つまり、give は動詞固有の意味として (20) のように表されているが、それが他の語と結びついて構文として用いられるときに、与格構文の形式ではなく、二重目的語構文の形式にのみ適合するということである。(21b, d) や (22b) は英語の統語構造としては適格な連鎖であるが、その構造に対応する概念構造によってこれらの文の適格性が認められず、所有関係を含意する二重目的語構文の形式である (21a, c) や (22a) でのみ認められるのである。さらに、二重目的語構文とイディオムの間も明確な境界線があるわけではない。(21a) の場合、"give ~ a hand" という連鎖は「~を手助けする」という意味であるが、この "a hand" はもちろん "help" や "support" を意味する比喩表現であることから、"a hand" に相当する部分を HELP という定項で表された概念構造を想定できる。

(23) [x CAUSE [z BE WITH HELP]]

動詞 *send* は所有関係の移動ではなく、物理的移動を表す。着点が場所を表すときは与格構文のみ可能で二重目的語構文は容認されないことはよく知られている。これは、(19)の推論規則から説明可能である。(24d)を容認可能にするには、目的語の *London* を「*London*にいる人や団体・組織等」とみなすメトニミー解釈が強制される。

- (24) a. John sent a package to Mary.
 b. John sent Mary a package.
 c. John sent a package to London.
 d. *John sent London a package.

ラテン語に由来する英語動詞 *donate* は *give* 等と同じく授与関係を表す動詞であるが、二重目的語構文では通例用いられない。

- (25) a. John donated his money to the poor children.
 b. *John donated the poor children his money.

動詞には内在する統語情報として、下位範疇化を指定する場合と指定しない場合があると考えたい。*give* は下位範疇化に関して無指定であり、与格構文・二重目的語構文のどちらでも表すことができる。しかし、*donate* は次のような統語的な下位範疇化情報をもっていると仮定する。

- (26) *donate*
 SS V (+[NP to NP])

制約に基づくアプローチでは、統語情報と意味情報のマッチングによって文の認可が決定する。動詞 *donate* の場合、動詞 *give* に近似した概念構造をもっていることから本来どちらの構文に現れてもよいはずであるが、二重目的語構文が許されないのは、(26)のような統語的な下位範疇化の情報を持っているからである。つまり、意味論のサイドで許される構造が統語論のサイドで許されないという不一致を招き、(25b)が不適格であると見なされるのである。⁵

3.2.3.for- 与格構文の場合

次に、for- 与格構文の動詞と与格交替を考察する。まず、動詞 *buy* を例とした(2)を再掲する。

- (2) a. Mary bought a book for the man.
 b. Mary bought the man a book.

buy は元来2項動詞であるから、以下のようなCSをもつ構造をしていると考えられる。

(27)

PS /bai/

SS V

CS [x CAUSE [y COME INTO POSSESSION](IN EXCHANGE OF MONEY)]

この他、for- 与格交替を示す動詞としては、make, build, cook などの作成動詞、sing などの演奏動詞である。これらの CS は次のように表すことができる。

(28) 作成動詞：[x CAUSE [y COME INTO EXISTENCE]

演奏動詞：[x ACT [y COME INTO EXISTENCE]

元来 2 項動詞であるこれらの動詞は、その概念構造の 2 つの変項がそのまま主語と目的語に写像すれば、次のような他動詞文ができる。⁶

(29) Mary bought a book.

(30) PS [Mary]₁ [bought]₂ [a]₃ [book]₄SS [_{VP}[NP]₁ [_V[V]₂ [_{NP}[DET]₃ [N]_{4,5}]]]₆CS [MARY]₁ CAUSE [[BOOK]₄; INDEF]_{3,5} COME INTO POSSESSION]
(IN EXCHANGE OF MONEY)]₂₌₆

では、(2) の構文はどのように分析できるだろうか。まず、前置詞 for はその意味の一つとして、次のような構造を仮定できる。

(31) for

PS /fɔr/

SS P (+[NP]₁)CS [_{BENEFICIARY} FOR x₁]

これを、合成すると (2a) の構造は次のようになる。

(32) PS [Mary]₁ [bought]₂ [a]₃ [book]₄ [for]₅ [the]₆ [man]₇

SS [_{VP} [NP]₁] [_V [V]₂] [_{NP} [DET]₃ [N]₄]₈ [_{PP} [P]₅ [_{NP} [DET]₆ [N]₇]₉]₁₀]₁₁

CS [[MARY₁ CAUSE [[BOOK₄; INDEF₃]₈ COME INTO POSSESSION]
(IN EXCHANGE OF MONEY)]]₂ [_{BENEFICIARY} FOR₅ [MAN₇; DEF₆]₉]₁₀]₁₁

獲得動詞・作成動詞・演奏動詞が二重目的語構文に生じた場合、動詞が表す行為によって、直接目的語要素が間接目的語要素を所有するものと解釈されるわけであるから、動詞の概念構造に二重目的語構文の概念構造が上書きされるような合成解釈規則を提案する。

(33) V: [x ACT/CAUSE [y COME INTO POSSESSION/EXISTENCE]]

+

NP-V-NP-NP: [x CAUSE [z BE WITH y]

=NP-V-NP-NP: [x₁ CAUSE [z₃ BE WITH y₂]

BY [[α₁ ACT/CAUSE [β₂ COME INTO POSSESSION/EXISTENCE]]

[_{BENEFICIARY} FOR γ₃]]

if z is interpreted as an appropriate animate recipient

(34) PS [Mary]₁ [bought]₂ [the]₃ [man]₄ [a]₅ [book]₆

SS [_{VP} [NP]₁] [_V [V]₂] [[[DET]₃ [N]₄]₇ [[DET]₅ [N]₆]₈]₉]₁₀

CS [[MARY₁ CAUSE [[MAN₄; DEF₃]₇ BE WITH [BOOK₆; INDEF₅]₈]

BY [[α₁ CAUSE [β₈ COME INTO POSSESSION]] [_{BENEFICIARY} FOR γ₇]]]₁₀

3.3. 日本語との対比

英語では、与格構文として to をとる動詞も for をとる動詞も二重目的語構文では同一の構造で表されるが、日本語の場合 to- 与格構文に相当する動詞「与える・やる・あげる」と for- 与格構文に相当する動詞「買う・作る」では、当該構文の表現に違いが見られることが知られている。

(35) a. 太郎がこどもにプラモデルを与えた (やった・あげた)

b. ?太郎がこどもにプラモデルを買った (作った)。

c. 太郎がこどもにプラモデルを買って (作って) やった (あげた)。

このように for- 与格構文に相当する動詞「買う・作る」を単独で授与表現に用いると不自然になり、補助動詞「やる・あげる」などを用いる必要がある。このことを本稿での分析でどのように説明できるだろうか。英語の場合、二重目的語構文の概念構造が動詞の概念構造を上書きするという (33) の規則を提案した。しかし、日本語の場合、二重目的語構文と与格構文に相当する統語構造の区別がなく、2つの目的語がそれぞれ二格とヲ格で表される。(35a)に見られる「与える・やる・あげる」などの

授与動詞は3項動詞であり、英語と変わることがない。そして、(19)の推論規則は英語のみに当てはまるものではないから、日本語でも(36)のように表示できる。英語とは異なり、それぞれの概念構造に対応する個別の統語構造、すなわち与格構文と二重目的語構文とを区別して持っておらず、どちらも「NP-に NP-を 与える・やる・くれる」という統語構造に対応する。日本語の場合、もちろん二格とヲ格をもつNPの線形順序は統語的に定められているわけではない。

(36) [太郎 CAUSE [プラモデル MOVE TO こども]]

= [太郎 CAUSE [こども BE WITH プラモデル]]

問題となるのは、(35b, c)の対比である。英語と同じく、「買う・作る」は元来2項動詞であるから、これらの動詞の概念構造は英語と同様の(27), (28)を想定しても差し支えないだろう。しかし、これらの動詞を含む構文が二格を伴う場合、二格で具現される変項を動詞「買う」の概念構造は持たない。英語の場合、(33)の二重目的語構文の合成解釈規則で認可されるが、日本語の場合二重目的語構文に相当する構文がないためこの規則は適用できない。したがって(35b)は二格が概念構造上適切な位置を保証されず、不適格となるわけである。そこで、日本語では、二格を項としてもつ補助動詞「やる・あげる」を援用するのである。補助動詞「やる・あげる」は、英語の give と同じ概念構造をもち、二格に相当する項をもつ。(35c)の概念構造は次のように表すことができる。「買って/作ってやる(あげる)」という複合動詞の概念構造は、「買う/作る」と「やる(あげる)」の概念構造が合成されたものである。

(37) 買う/作る:

[太郎 CAUSE [プラモデル COME INTO POSSESSION/EXISTENCE]]

+

やる(あげる):

[α CAUSE [β MOVE TO こども]]

(=[α CAUSE [こども BE WITH β]])

=

買って/作ってやる(あげる)

[太郎₁ CAUSE [プラモデル₂ COME INTO POSSESSION/EXISTENCE]]

+ [α_1 CAUSE [β_2 MOVE TO こども]] (= [α_1 CAUSE [こども BE WITH β_2]])

「やる(あげる)」の概念構造の変項 $\alpha \cdot \beta$ はそれぞれ「買う/作る」の概念構造上「太郎」・「プラモデル」と同一指示を受けなければならない。これには、影山(1993)が提案している「他動性調和の原則」または主題階層に基づくなんらかの同一指示解釈規則が関与していると思われる。

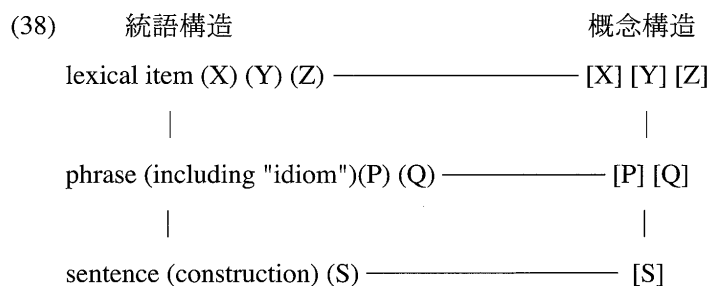
4. 結

以上、本稿では英語における与格交替の現象を Jackendoff の言語モデルによって説明することを試みた。与格構文と二重目的語構文の対応は、統語的に関連付けられるのではなく、概念構造上の推論

規則 (19) によって間接的に結び付けられるということと、for 与格構文と交替する二重目的語構文は、獲得動詞や作成動詞の概念構造に構文自体の概念構造が上書きされる合成解釈規則 (33) を提案した。さらに、3.3 節において日本語の授与表現との比較を試みた。

影山 (1996: 282-283) によれば、「結果構文」や「二重目的語構文」など特別な構文形式を備える英語と、複合動詞によって相当する表現を作り出す日本語との相違は、英語が概念構造における意味的な合成を発達させているのに対し、日本語は複合語という形態的な合成を発達させているという違いにあると述べている。すなわち、合成という同一操作が適用される文法レベルが異なるというわけである。構文的イディオムの特殊性を認める Jackendoff (1990) や Goldberg (1995) の方法は、特別な構文形式があるというだけであるのに対し、影山 (1996) は概念構造の上位事象と下位事象の組み合わせに一定の規則があることを示し、結果構文などがなぜ英語にのみ可能なのかという問いに原理的説明を与えている。しかし、いかなる構文も特殊なものではなく、具体的な概念構造を持つ語彙とスキーマ的な概念構造を持つ構文とが厳密に区別されない連続体を成すという Jackendoff (2002) や Culicover and Jackendoff (2005) の仮定に立てば、影山 (1996) の知見はどのように解釈しなおすことができるだろうか。

Jackendoff が仮定する言語モデルとその考え方は 3.1 節で述べたので繰り返さないが、制約に基づいて (constraint-based) 言語構造を認可するという仮定に立てば、日本語の複合動詞表現と英語の二重目的語構文との相違は、それぞれの構文における概念構造と統語構造の対応関係の認可が、それらを構成する比較的小さな単位 (語彙) で成立するのか、語彙と構文が合成解釈規則によって合成された、より大きな単位で成立するのかという違いに帰することができる。派生に基づく (derivation-based) アプローチから考えれば、影山 (1996) の主張どおり、英語は概念構造における合成、日本語は形態的な合成というように同一操作が異なった文法部門によって行われるというパラメータを設定することができるだろう。しかし、それを制約に基づく (constraint-based) アプローチで見なおした場合、自律した概念構造と統語 (形態も含む) 構造が互に対応規則で結ばれているわけであるから、操作を扱う文法部門の相違とは見なされず、構成要素のどの単位を対応規則で結んでいるかという相違であると解釈できるのである。(38) で図示すると、日本語の場合、統語構造を構成している語彙要素の一つ一つ (X, Y, Z) がそれぞれ概念構造 [X], [Y], [Z] に対応する傾向があるのに対し、英語の場合、語彙項目のレベルで対応するだけでなく、より大きな phrase (P), (Q) や sentence や construction (S) の単位においても概念構造の合成規則などによって対応するのである。



(38) では lexical item、phrase、sentence を線をつないで図示しているが、小さな単位が合成されてより大きな単位を構成していくという派生の段階を表しているのではないことに注意されたい。統語

構造・概念構造それぞれには複数の要素を統合するための何らかの形成規則は存在するが、重要なのはどの大きさの構造であれ、言語の理解と産出のためには、統語構造と概念構造（と音韻構造）が interface rules によって適格な対応関係が保証されねばならないということを示しているのである。

ここで示した仮説はあくまでも Jackendoff の言語モデルによる再解釈という試案であり、影山(1996)のそれに比べて、日英語の対比という点において扱っている構文も少なく、依然論拠に乏しいことは認めざるを得ない。語彙と構文の連続性を認めるか否か、さらに統語論と意味論の位置付けをどのようにみなすかによって、文法モデルは大いに変わってくるだろう。日本語や英語における他の言語現象・言語事実に目を向けながら、適切な言語モデルを構築することを今後の課題としたい。

注

1. 与格交替に関わる動詞の種類および意味的・形態音韻的・情報構造的・統語的制約に関しては岸本(2001)にまとめられている。
2. Jackendoff の言語理論の変遷の詳細は中右(2001)参照。
3. Culicover and Jackendoff (2005) では、"Simpler Syntax Hypothesis" と称し、生成文法で考えられてきた適格な統語派生に必要な移動規則や二項枝分かれの原則を認めないが、本稿ではこの主張の是非に関しては問題にしない。本稿では、文の命題は統語構造上 V の最大投射に相当するものと考え、(17)・(18)などの統語構造と概念構造との対応関係に見られるように、命題上の主語要素は統語的には VP 指定部に写像するという、いわば「VP 内主語」を仮定した。Larson 流の VP-shell 構造は統語構造上必ずしも必要とは考えないが、一致などの統語的な要請から IP(=S) 指定部へ移動する規則を設ける必要があるかどうかは今後の検討課題としたい。なお、中村(2003)は、統語構造と概念構造は原則として同型的なものであると主張し、その双方が派生規則をもつ「動的意味論」を提案している。
4. Pinker (1989: 210-212) は、<cause-focus> という causal subordination feature を用いて、両構文の対応関係を説明している。
5. Pinker (1989: 46) では、donate のアクセント位置が変われば、二重目的語構文でも用いられる例を示しているが、これは下位範疇化情報が構文の概念構造とそれに対応する統語構造によって書きされることを示唆する。また、Pinker は、donate などフランス語から入ってきたラテン系動詞が二重目的語構文に用いられないのは、借用元のフランス語の文法において二重目的語構文がなく、to- 与格構文に相当する構文しかないからだと述べている。これは、動詞が他の言語から借用される際に、動詞の意味だけでなく統語的下位範疇化の情報も借用されるということを示唆していて興味深い。
6. (30) の概念構造では、本来 "bought" に含まれる時制要素 PAST を区別するべきだが、ここでは紙面の都合上表記を簡略化した。また、概念構造上の変項と統語構造上の文法関係の写像に関しては、Jackendoff も主題階層に基づく優先規則 (preference rules) を認めている。Culicover and Jackendoff (2005: 185) が提案する主題階層は次の通りである。

(i) Actor/Agent > Patient/Undergoer/Beneficiary > non-Patient theme > other

参考文献

- Akmajian, Adrian and Frank W. Heny (1975) *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Aoun, Joseph and Audrey Li (1989) "Scope and Consistency," *Linguistic Inquiry* 20, 141-172.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation: a Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, Mark (1996) "On the Structural Positions of Themes and Goals," *Phrase Structure and the Lexicon* ed. by Johan Rooryck and Laurie Zaring, 7-34, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions--A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Gropen, Jess, Steven Pinker, Michelle Hollander, Richard Goldberg, and Ronald Wilson (1989) "The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English," *Language* 65, 203-257.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantic and Cognition*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1996) "Conceptual Semantics and Cognitive Linguistics," *Cognitive Linguistics* 7, 93-129.
- Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*, Oxford University Press, Oxford.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 - 言語と認知の接点』(日英語対照研究シリーズ (5)) くろしお出版, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』(日英語比較選書 8) 研究社出版, 東京.
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」『日英対照 動詞の意味と構文』影山太郎編, 127-153, 大修館書店, 東京.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- 中村 捷 (2003) 『意味論 - 動的意味論』(現代の英語学シリーズ 6) 開拓社, 東京.
- 中右 実 (2001) 「ジャッケンドフ」『言語 2001・2 別冊 言語の 20 世紀 101 人』, 210-211, 大修館書店, 東京.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 米山三明・加賀信広 (2001) 『語の意味と意味役割』(英語学モノグラフシリーズ 17) 研究社出版, 東京.